
気まぐれセカンドライフ

誰かの何か

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれセカンドライフ

【Zコード】

Z0239Z

【作者名】

誰かの何か

【あらすじ】

高校生の主人公である潤が突然異世界へ飛ばされて、ある時は二ート、またある時は宮殿の主になつたりと、セカンドライフを満喫していく。そんなお話。小説を書くのが初めてで、書き方・内容が拙いですが、どうぞよろしくお願ひします。

潤「仕事したり鬭つたりしてリアルが充実してはいるが、リア充とは違うと思わざるを得ない今日この頃…チクショウ、目から汗がとまりねえ」

1 なんか、死にました（前書き）

はじめまして

作者の文才の都合上、亀更新となりますが、よろしくお願ひします

では、はじまりはじまつ～

1 なんか、死にました

大地に邪なるもの埋め尽くす時、虚空より人舞い降りて、混沌と共に世界を破壊するであろう。 (『ワイスニルの予言』)

「ん、ここは?」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見あたらないから真っ白い空間か?

まあ、どちらにせよここは俺の知らない場所には違いない。

・・・・・エエ～ッ!..

まあ、落ち着きましょうや俺。

まずは今までの行動をおさらいしよう。

学校から帰つて来る 夕飯を食べる 勉強、と思わせてリハベ 1
2時を過ぎたので寝る 日が覚める 今

ああ、もしかしなくともこれ夢じや…

「夢じやないよ」

五月蠅いな、人の思考に割り込むな。

・・・・・エエ～ッ!.. (本日2回目)

「な、なんだお前。つてかどこから出できたー」

さつき俺に声を掛けたであろうアニメに出てきそうな少女に向かつて俺は言った。

「私?私は転生の女神だよ~?」

この娘は可哀想な子という認識でいいのかな。

「違うもん。転生の女神だもん!」

んな事言われたって…

「じゃ、女神らしい事見せてよ」

「いじょ～」

そう言つと女神（自称）は向やから小声でしゃべり始めた。
シ、シユールだ…

ボワッ

独り言を終えたらしい少女の手の平には炎の球が現れた。

「これが魔法。どう? これで私が可哀想な子じゃないって分かった
でしょ」

「こんなのが見せられたら

「お、おひ。本当らしいな
としか言えませんよ。はい。

「で、漸く本題何だけど、ビーハヤリあなたは寝ている時に死んじや
つたらしいの」

ん?

「ちょ、ちょっと待て。え? 僕死んだの?」

「うん。原因もよく分からず」

しかも原因不明〜!

つてか読めていたぞ、この後俺は異世界に転生されて、厄介事に巻
き込まれていくんだな。で、この転生の女神（自称）が俺の案内役
と。

はいはいテンプレ

「その通り! あなたはこれから異世界でセカンドライフを始めるの」
提案じやなくて決定事項かよ… つてか心を読むな。

「俺に拒否権は?」

「ない!」

「デスよね〜。」

「まあ、そのまま異世界つてのも可哀想だから何か願いを3つまで

叶えてあげるよ

テンプレキター！

「じゃ、今まま何も変えずにスタートして

「良いの？^{チート}反則的な能力も与えられるよ？」

「良いんだよ。俺にも色々あるからな…」

よし、いい感じでミステリアスな感じになりそうだ。

「なる程。元から身体能力が並外れてるのか～」

「俺のミステリアスを返せ～！！」

KY女神～！！もう流行つてない？さいですか。因みに俺は今アーラル〇ル〇ル〇になつていてる。

「な、何で落ち込んでるのかよく分からぬけど、『めんなさい』」「はあ…まあいいや。で、2つ目は異世界でもお前と話が出来るようにして」

異世界の知識なんて俺にはないからな。

「いいけど私も暇じゃないから何時でもつて訳にはいかないよ？」

「それでもいい。じゃ、3つ目は俺が行く世界の言語が話せるようにして」

「おっ！いい事に気付いたね～。あなたは^{チート}反則的な能力がないから言語も学ばなければいけないとこらだつたんだよ～」

「だろうな。俺が元の世界で読んだ本（もちろんラノベですが何か？）にも似たような事が書いてあつたからな。

「じゃ、早速異世界へ…」

「ちょっと待つた

「何よ

決めゼリフを遮られてかなりご不満な様子。でもこれだけは聞いておきたい。

「まだ一切人物紹介をしてな…」

「メタ発言すなッ！次的话ですればいいでしょ～！」

次の話つて…お前もメタ発言してんじゃねえか。

「いいの…じゃ、気を取り直して～異世界へしゅつ…」

「出発～
・・・・してやつたり

1 なんか、死にました（後書き）

次回予告

潤「予定通り人物紹介をします。つてか絶対に俺の容姿とか分からないもんね」

2 人物紹介（前書き）

2話目につづります

2 人物紹介

羽山 潤
はやま じゅん

我等が主人公の潤君。黒髪黒目、日本の平均的な身長にやや細身。容姿も中の上と、何処にでも居そうな高校生。身体能力はかなり良いらしいが如何に…ある1点において以外は優しい性格。異世界でどう生きていくのか乞うご期待。

転生の女神てんせいのめがみ

主人公を異世界へと送る案内役。金髪灼眼、150cmを少し越えた身長と容姿は上の中とかなり良い顔立ちのよつで…身体の方はメリハリがほとんど無く今後に期待、は出来な…

バコーンッ！！

しばらくお待ちください

「え〜、作者が何者かに、ここ大事。何者かに襲撃されて星なつてしまつたので、私、転生の女神が代わりに紹介しま〜す。」

「何者かに、ねえ」

「何者かに、だよね〜潤君(ニコッ)」

「イ、イエス マム。何者かにであります！」

「よろしい。つと、話が逸れてきた。じゃ、人物紹介はこの位にして、潤君が飛ばされた異世界について軽く説明しちゃいま〜す」

「まあ、本編じゃまだ異世界に着いてないけどな…」

「細かい事はいいの！潤君が飛ばされた異世界『ウエドリア』は剣と魔法がメインの世界で〜す」

「物騒な世界だなあ」

「まあ、魔獣もいるしね」

「うわ～、やっぱ行きたいね～」

「そう言わずに、楽しい事も沢山あるからさ～逝つてきなよ

「危ない世界なだけにシャレになつてね～！…」

「つと、また話が逸れちゃつた。潤君がどうでもいい」と言つながら

「どうでもいいことじやねえよ。リアルに死活問題だよ」

「ハイハイヨカツタネー」

「誰か助けて～！…」

「で、この世界にはお約束のギルドとか獣人がいる他に、古の神々の宮殿がどつかにあるらしいよ。私も一応神様だけど、そっちには居ないんであしからず」

「無視しやがった。こいつ遂に俺の存在をスルーし始めた」

「あと、この世界には貴族も居るんでこの世界に行く人は要注意だね～。あ、そういえばこれからそこに逝こうとする人がいるんだよ～？笑っちゃうよね～」

「俺の扱いひでえ！しかもまた逝こうになつてるし…」

「じゃ、いよいよ本編ヘレッソ～！」

「開始早々に逝かないようにするんでよろしくお願ひします

2 人物紹介（後書き）

次回予告

潤「次からやつと異世界か。ん?なかなか危ない香りが…ってか人物紹介の時、俺らどこで喋つてたんだ?」

3 なんか、縁のものが…（前書き）

やつと異世界に到着

3 なんか、縁のものが…

「何なの」のテンプレ展開
転生した瞬間、といつても床に穴が開くとかじゃなく、眠くなつて意識失つて目覚めたらここに居た。俺の目の前には体長2メートルを越そうかといつキツネ色の体毛を纏つた狼っぽい生物が3匹居た。

それもうキツネでいいんじゃね？

とか思つた奴、後で屋上来い。キツネは狼より愛くるしい顔してるよ。田を見る田を、丸いキューートな田とつり上がつた獲物を狙う田だよ？どつちがかわいいかなんて分かりきつてるじゃないか。同じネコ田イヌ科だとは思えないね！まあ、実際にキツネも狼も動物園でしか見たこと無いんだけども…やつ、俺とキツネとの出会いは小学3年生のとき遠足で…

「潤君。作者も読者の皆様も飽きてきてるよ。作者に至つては敵を狼からミドリムシにしようか悩み出したよ？」

「ミドリムシッ！？敵じゃねえじゃん！つてか戦闘に持ち込むほど作者に才能があるようには思えないよ」

「ミドリムシが現れた」

「何かデカいミドリムシきたー！つてか変なテロップ流れたー！」
ミドリムシなんて教科書でしか見たことないからあればそういうのが分からないけど！狼と同じ位の大きさの緑の物体に紐みたいなついてるぞ奴は。あれは教科書の写真と一致する（大きさ以外はな）。

「あ～あ、作者怒らしちゃった。じゃ、あとは頑張つてね～」

KY女神はそう言うと俺との交信を切つた。クソッ、自分だけ作
者の怒りから逃れやがった。

「はあ…しようがないからやりますか」

そう俺が言つと、今まで律儀に待つてくれていた狼が一斉に向か
つてきた。ミドリムシはその場で待機のようだ：

「戦闘描写とか作者は書けんのか、なつ！」

真つ正面から突っ込んできた狼その1を避けてすれ違いざまに狼
その1の首ら辺に肘で1発打ち込んだ。その1発で狼その1は気絶
をした。急所だからちょっとした力で気絶させられる。続いて狼そ
の2が、俺が1匹倒して油断している所を狙つたのか、後ろから飛
びかかってきた。

「俺の辞書に油断の2文字は、ないっ！」

振り返るような時間的余裕はないので、狼その2に回し蹴りを食
らわす。そうすると狼その2が5メートル位吹っ飛んでやつぱり気
絶。

狼その3は自分1匹だけじゃ倒せないと悟つたのか、逃亡した。
相手の実力を理解したのか。なかなか賢い狼だ。

「あとはコイツだけか…」

今まで空氣となっていた、作者の嫌がらせの象徴であるミドリムシ
様が鞭毛運動をしている。

人類と単細胞生物の決戦が今始まる？

3 なんか、縁のものが…（後書き）

次回予告

潤「次回はいよいよヤツと戦闘だぜ！作者はまだまだ戦闘描写に慣れてなさそうだけど、頑張って書いてくれよ？」

4 なんか、力押しです（前書き）

前回に引き続き戦闘シーン

4 なんか、力押しです

「ミドリムシ」それは中央にピンクの細胞核や、一ヵロ一ヵロした鞭毛を持つコーグレナ目コーグレナ科の生物。ちなみにコーグレナとは美しい眼点という意味だ。

つまり、気持ち悪いという認識でOKという事。

そんな生物と俺は戦おうとしている。素手で。

・・・・手袋って、偉大だったんだな

「じゃ、気分は乗らないけどやりますか

俺がヤツに向かつて走り出すと、ヤツは鞭毛を俺に伸ばし始めた。「キモイっつーの」

俺は鞭毛を掴み取り引きちぎった。幸い鞭毛の感触はロープのそれと似ていたのでテンションが下がることはなかった。

ヤツは特に痛みを感じないのか、ちぎられて短くなつた鞭毛を再び俺に向けてきた。

いちいち引きちぎつてもきりがないので、鞭毛を避けつつ本体の核を壊しに向かつた。

と、そこで俺はある事を思い出し、足下にあつた石を拾つて鞭毛の届かない位置まで下がつた。

「あれが本当にミドリムシだとしたら

俺は石をヤツの核目掛けて投げる。

音速に迫る速さで。まあ、この事はそのまま話すとして…

ゴスッという音がして、核の少し手前で止まる。つかアイツ硬すぎだろ。撃ち抜くつもりでやつたのに…

シユーツ

「」の音？そりやあヤツが再生してる音に決まっているだろ。はあ…
「やつぱりな。ミドリムシって名前も動きも虫っぽいけど実は光合
成みたいな植物っぽい事もできるんだよな～」

正確には原生生物っていうて、動物でも植物でもない。中途半端
な奴め。

「せつかく頭使って倒そうと思つたけど、弱点も見いだせないし
手札も石と素手しかない。力押しでいきますか」

という訳でここからは読者の皆さんには楽しくも何ともない戦い
が始まります。

まずは石を沢山拾う。相手がその場から殆ど動けないのが幸いだ
な。水の生物陸に揚げるからだ作者め。

それでもつて拾った石を核に向かつて連射～
ズドドドドッと凄い音を出しながら石はヤツの核に向かつて飛
んでいく。寸分違わず同じ場所に。

そしてヤツの再生速度を超えた連射で遂に核を捉えた。

最後の一発として大きめの石をヤツの核に向かつて全力で投げつ
けた。すると核が壊れ、ヤツの身体は爆発するように飛散した。

最後の仕事として俺は飛んでくるヤツの残骸を避けて避けて避け
て…

つてな感じで人類と単細胞生物との決戦は人類の勝利で幕を閉じ
た。

4 なんか、力押しです（後書き）

次回予告

潤「やあ～、ヤツはとにかくキモかった。つてか光合成って再生関係なくね？まあ、いいや、次回は異世界で初めて人と会うぜ。第1異世界人がどんな奴なのか気になるな～」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（前書き）

人に、会いたいです。

5 なんか、作者に嫌われた気がします

無事作者の^{ミドリムシ}悪意を倒して、今は広い平原の中を移動中（ちなみに元の世界で死ぬ直前の服装は上下ともにジャージなのでパジャマで戦闘というシユールな画にはならなかった）。ってか広すぎじゃね！？周りに何もねえよ。KY女神は忙しいのか繋がらないし…こう何もないと方向が合つてんのかすら分かんね～よ。

（1時間後）

「まだかよ～そろそろ木の一本でも見えていい頃だろ～」

（2時間後）

「・・・・・」

（3時間後）

「作者アアアアツ！～」りや何の嫌がらせだあ！さっきから石ころとか花の位置が何一つ変わってねえよ！風景のスペックが低いなんてレベルじやねえぞ！？」

（4時間後）

「作者さんよ～。このままだと予告で言つてた第1異世界人に会えずにこの話終わりそうだぞ～？」

ガタン

「ん？何の音だ？つて、やつと風景動いた～！うわ～、前に進めるつて素晴らしい！」

お～、森が見えてきた。何か達成感で涙が…

あ、そうそう、KY女神も居ないし一人で喋つても危ない人に

なつちやうから、こつからは心の中での咳きで。

森に入つてからは空も暗くなり始め、良さそうな場所（サバイバルの経験なんて無いのであくまでも良さそうな場所）も見つかって、今日は野宿することとなつた。食事はしょうがないから木に実つていた果実らしきもので済ませた。

……………そういえば今回つて人と会うんじゃなかつたっけ？まあ、思つたより進まなかつたから断念したのかな？

そんな事を考えながら俺は寝る準備をはじ…

ヒュンツ

何かが俺の耳元を過ぎていつた。ナイフだ。その時俺はこう思わざるを得なかつた。

人と会つてそういう事！？

確かに第1異世界人だけれども、確かに盗賊じゃないなんて言つてなかつたけれどもつ！

俺がそんな事を思つていると、森の中から2人の盗賊（仮）が姿を現した。

「よお、にいちゃん。こんな時間に森にいるたあ感心しないなあ」

と、盗賊1（仮）

「そうそ、俺たちみたいな奴に狙われるぜえ？」

と、盗賊2（仮）

「もしかしながら、あなたたちつて盗賊ですか？」

と、俺は盗賊（仮）に尋ねた。すると盗賊1（仮）は、

「ああ、そうだぜ？さつきも街道を歩いてた新人っぽい冒険者を殺して金を奪つてきた。なあ、相棒？」

と下品なニヤツキを浮かべて隣をみた。しかしそこに盗賊2（断定）の姿はない。

「ああ、隣に居た人ならさつきあなたが『ああ、そうだぜ?』と言つた瞬間に殴り飛ばしたんで今頃はどつかの木にぶつかって氣絶中かと」

決して作者が戦闘描写が下手だから何時のためにか終わらせておこうなんて考えたわけじゃない。

「てめえ、よくもつ……」

盗賊1（断定）は顔を真っ赤にして懐から大振りのナイフを取りだした。ちなみに顔を真っ赤にしてつてのは恋する乙女的な感じじやなく、怒り心頭つて方の…え？ 分かってる？ さいですか。

顔を真っ赤にするつて言えばね～、俺が中学2年生の時に…

「死ねや！」

盗賊1（断定）が俺に向かつて手に持つているナイフを振り下ろしてきた。まだ話の途中なのに…毎に出会つた狼たちよりせつかちだな。しょうがない、サクッと終わらせますか。

「舐めた真似しやがつて」

再び俺にナイフが迫る。白刃の煌めきは今までに俺の命を刈り取ろうと…やめたやめた。俺にこんな高度な思考なんて似合わないな。「そんなもん振り回して危ないですよ」と

そう言つて俺は振り下ろされたナイフを避け、盗賊1（断定）に足払いをして前向きに倒れさせようとする。案の定盗賊1（断定）は倒れ始め、俺は盗賊1（断定）の鳩尾田掛けて膝蹴りを食らわした。盗賊1（断定）は膝蹴りがクリーンヒットして肺の中の空気と共に血を吐いて気絶した。

「ふ～、終わつたな」

そう言つて俺は盗賊たちを放つておいて夜の森を後にした。眠気？ 命のやりとりをした後にそんなもんありませんよ～。

「あ、どうせなら街道への出方聞いとくんだった」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（後書き）

次回予告

潤「最近後書き以外で名前が出てこない潤君です えへっと、次回はいよいよ街に入るのか？ってからくなもん食つてないんでマジで入れて下さい。あと作者、盗賊の表記がいちいち^懶陶しいんだけど。俺の扱いも酷いし…後で覚えてろよ～」

6 なんか、いい人みたいですね（前書き）

潤は二ートにジョブチェンジした。

6 なんか、いい人みたいで

「はあ、やつと着いた」

俺は盗賊気絶させた後、さんざん歩き回って街道を見つけ、やつとの思いでどつかの街の前まで辿り着いた。詳しく述べる？『冗談を、今は腹が減ってるんでそんな暇ありませんよ』。

（（ここはカラコルね））

KY女神もつい5分位前に繋がった。何で括弧が変わったか？それはだな、実は今までアイツは俺の頭の中に直接話し掛けてたんだ。んでもってその事をさつき知らされて、なら俺もできんじゃね？ってなつて実際に出来ちゃったから、じゃあ声に出してないんだから括弧を変えなきゃつていうわけ。

（（街の名前か？））

こんな感じで。

（（そう。貿易都市で色んな物が手に入るんだよ～？））

（（へ～。でも俺金持つてないぞ））

盗賊から剥ぎ取つてくるべきだつたかな…

（（この街、つていうか殆どの街にはギルドつていつ組織があつて、そこに加入すれば依頼の報酬としてお金が貰えるよ～））

（（なるほど。じゃ、早速行きますか））

一旦交信を切つて俺は街の中へと入つていぐ。

しばらく歩いていくと、明らかに普通の住宅とは大きとも雰囲気も違う建物が目に入った。

「あれがギルドか。でかい建物だな～」

入つてみないことには始まらないと、その建物に足を踏み入れる。中はとても広かつたが、ゴツい男が沢山いて、どちらかといふと狭苦しい感じがした。

カウンターには受付嬢、ではなく爽やかな男性が座つていた。テンションショーンだ下がりだ。

「すいませ～ん。ギルドに入加入したいんすけど～」

テンション今なお下降中の俺。

「はいっギルドの加入ですね～！」ひらひら身分証明書と経歴をお書き下さい！」

やたらテンション高い爽やか兄さん。

ん？ 身分証明書なんて持つてないぞ～？

「身分証明書つてないとダメですかね」

ダメもとで聞いてみる。そして帰ってきた答へが

「ダメですね。もし犯罪者を加入させてしまつとギルドの信用に関わりますから」

というものだつた。ま、何となく分かつてだけど。

「身分証明書忘れちゃつたんで出直して来ます」

という無難なことを言つてギルドを出た。

「さて、どうするか～」

ＫＹ女神とはまた繋がらなくなつたし… とりあえず仕事探すか～

仕事みつからね～…！ 何でここの仕事は専門的なものばっかりなんだよ！

おまけに商売始めようにもギルドに加入しなきゃ出来ないらしい
し…ギルドなんて創つた奴今すぐ出てこ～い！

はあ、もう仕事しなくていいかな。俺は悪くない。社会が俺を受け入れてくれないだけなんだ。ハハハハハ。

「あんたこんな所で何してんの？ 邪魔なんだけど」

不意に俺の背後から声が聞こえた。振り返るとそこには…

いい感じで区切れそつだから今回せième。え？ダメ？セイですか。

作者からダメと言われたのでもうひとつ進めるよ～。
俺の背後に立っていたのは、綺麗な夕焼け空をそのまま移したか
のようなオレンジ色の髪をもち、自信に満ち溢れているようなやや
つら田の田も髪と同じオレンジ。容姿は上の上と言つても過言では
無い。田測で身長一六〇cm位の少女だった。だが、やつとの言動
といふ、この容姿といふ、

「どこのシンデレですか？」

しまつたアアアッ！！思わず口に出してしまつた～！

「はあ！？何訳わかんない事言つてんの？」

反応から察するに異世界にはシンデレといふ言葉は無いらしく。

が、機嫌を損ねてしまつた。

「ゴメン。君があまりにも可愛かつたからつこ」

すると彼女は顔を真っ赤に染めて、

「か、可愛い！？な、何変な事言つてんのよー」

と言つてきた。うん、ナイスシンデレ。

「ところであ、今日俺金も無くて泊まる所無いんだよ～。一日だけ泊めてくれない？」

深刻な問題を忘れてた。つて事でお泊まり交渉開始！

「ふ、ふざけないで！誰があんたなんか」

開始2秒でノックダウンされました。

「そ、そうか。残念だが他をあたるよ」

無理に泊めてもうわけにはいかないからな～。じゃ、今夜も野宿かな。

よつこらせ、と俺が立ち上がり街の外へ歩き出しつとすると、
「い、一田くらいなら、しょうがないから泊めてあげてもいいわよ
わつきも言つたがもう一度言おう。

ナイスツンデレ

6 なんか、いい人みたいですね（後書き）

次回予告

潤「何だあの前書きはアアア！俺は断じて二ートじゃない！二ートつていうのはだな、not in education, employment or trainingの略でだな・・・（長いので省略）だから俺は二ートじゃない！さて、ではやつと次回予告だな。次回はツンデレと仲良くなれば彼女の過去が明らかに！全ては俺次第ってか？。選択肢間違えないようにしないと」

7 なんか、真面目です（前書き）

何か纏まりの無い話になってしまった。

7 なんか、真面目です

「おじやましまーす」

そう言つて俺はシンデレさん（仮称）の家に入れてもらつた。1人暮らしなのか生活感を感じさせる物はクローゼットとテーブルとイスくらいだつた。キッチンはあるが料理はしないのかあまりにも綺麗だ…ってか未使用だろ。

「何突つ立つてんのよ。さつさとそこいら辺に座りなさい」

では遠慮なく、とイスに座る俺。シンデレさんも近くのイスに座る。

「ん？ そういうえば君つて1人暮らしだよね？ 何でイスが2つも…はつ！ もしかしてこれには今回の話のキー・ポイントなんじゃ…」

「何一人で暴走してんのよ？ イスが2つあるのは、このテーブルを買つたときにつ属品として付いてきたからよ」

「バツカジやないの、と言わんばかりに…

「バツカジやないの？」

言されました。

「ごめんなさい… それにしても生活感の無い部屋だなー」

女性にこんな事聞くのは失礼だと分かつてはいるけど何か引っかかるものを感じたので聞いてみる。

「あ、あんたなんかに関係無いでしょ！」

やはり無理か… ってか一切デレを見せないってどういうこと？ このままじゃせつかくのシンデレラがシンシンになっちゃうぞ？

「悪かった。そうだ、まだお互いに自己紹介してなかつたよな？」

「え？ ええ、まだね」

自己紹介は大切だからな。お互いの印象アップの為にも。

「俺の名前は羽山 潤。出身とかは… 知りたかつたら教えるけど…

？」

そう言つてシンデレさんを見る。

「珍しい名前ね。話すことが嫌じゃなら教えて。犯罪者だとこ
っちは困るし」

「この世界って犯罪者が多いのか? ギルドでも言われたし…
だが何て言うべきか、いきなり異世界人ですなんて言つても信じ
てもらえないだろうし。

「羽山 潣つて珍しい名前だろ? それは俺が他の世界から来たから
なんだ」

つて事で正直に言つことにしました。

「何言つてんの! ? 確かにハヤマなんて名前は珍しいけど他の世界
なんて… ふざるものいい加減にして! 」

まあ、こうなりますわな。

「今は信じてもえなくていい。あと、俺の名前は瀧の方。羽山は
ファミリーネームだよ」

「ふうん、まあいいわ。言動は怪しいけど悪い人じゃなさそうだし
言動は怪しいけど… ホントの事なんだけどな~

「そりやどーも、じゃ今度は君の名前を教えてよ」

「私? 私はセレン。セレン・レイナンドよ」

「セレンね。セレンはギルドに入ってるの?」

今更だがセレンの腰には西洋の剣がさしてある。

「ああ、この剣を見て言つてるのね。いいえ、ギルドには入つてな
いわ。ただの護身用よ」

ふうん。日本じゃ剣なんて持つてたら即銃刀法違反で捕まるから
遠い存在だったけど、こっちじゃこんなに一般的なのかな?

「そういえば、セレンの髪の色つて珍しいけど、それって地毛?」

元の世界にこんな髪の色の人がいないのはもちろん、こっちの世
界でも赤、黄、緑、青の4種類しかいなかつた。

そう言つた瞬間、セレンの顔に影が差した。

これが今回の話のキーポイントになりそうだな。

「ええ、まあね」

と、さつきまででは想像もつかないほどその声は小さく、重かつた。

そんな重苦しくなつた空氣の中、俺は思った。

あれ？俺ら（作者含む）が考えてた以上にシリアルスだぞ。

「何か聞いたやうない事だつたか…その、すまん」

「ここでふざけるのは少し違つう氣がするので素直に謝つておくれ。

「いいの。氣にしないで」

・・・・・
「気まず〜〜〜い！誰か助けて！つてかＫＹ女神仕事入りすぎだろ
！繫がりにく過ぎるわッ！！

一体どこで選択肢間違えたんだ？あれ？つてか最初から選択肢の
「マンドが下に出でないぞ？まさかこれはギャルゲーじゃなかつ
「ちょっと長くなるわよ？」

「はいっ？」

何のこと？選択肢の「マンドが出てない理由か？

「私の髪の色、珍しそうって言つたでしょ？」

「あ、ああ」

そつちの話か～

「私の髪のこのオレンジ色はね、この世界じゃ異端の色なの
「異端？どうして？綺麗な色なのに」

「う、うるさい！黙つて聞いてて！」

こんなシーンでシンデレラ発動させなくとも。

「人が生きていく上で欠かせない太陽が沈み、闇が人々を包み込む

直前の色。それは破滅の色と人々から恐れられてる。それがこの

オレンジ色よ」

「んなバカな」

髪の色なんてどうしようもないだろう。

「そんな事を教義としているのが、この世界の人口の9割以上が信仰している《シャイネン教》よ」

ドイツ語で《光る》か、如何にも闇が嫌いそうな名前だ。

「そうして私はこの16年間迫害され続けてきたの。どうつ？これあなたも私の事が嫌になつたでしょ…？いいのよつ、もつ慣れてるか…」

「今まで、辛かつたんだな」

そう言つた俺は、いや、そつとしか言えなかつた情けない俺はセルンの頭を撫でる。

「な、なにを……ふ、ふえ～ん」

と、遂に限界がきたのか泣き出してしまつた。

「泣くといいさ。その涙と一緒に今まで溜め込んできたもの全部流しちまえ」

そうして俺は彼女が泣き止むまで頭を撫で続けた。

7 なんか、真面目です（後書き）

次回予告

潤「珍しく真面目度の高い話だったなー。こんな読んでも面白くないつつーの。次回は頼むよ？次回はどうやらセレンとお出掛けするらしいぞ？マジっすか？めっちゃ楽しみになってきた！」

8 なんか、旅に出ます（準備編）（前書き）

小説長文化計画実行中

中国語みたいです。.

8 なんか、旅に出ます（準備編）

結局セレンが泣きやむ頃には夜になってしまい、夕飯を俺が（こ
こ重要）作り、普通に寝た。自分で作ったとはいえ、調理したもの
があんなに美味しいとは思わなかつた。あの時はつい悲しくもない
のに涙が出てしまつたね。

で、今は俺が作った（ここアンダーライン）朝食も終えてひと
息ついているところだ。

「ところでジュンはこいつ出発するの？」

・・・・はい？ 何のこと？

「何惚けた顔してんのよ。こじり泊したらまた旅に出るんじゃな
いの？」

「そりだつたつけ？ ってか俺つて旅してたんだつけ？ いや、違うは
ずだ。そもそも俺はこっち（異世界）に飛ばされてこの街に流れ着
いただけのはず。待てよ？ 人生という面においては俺は旅人だな。
そう考へると俺はた…

「違つたの？ 酷く難しい顔してるけど。べ、別にジュンなんか居て
も居なくても変わんないから居てくれてもいいのよ？」

顔を真つ赤にしながら提案してくる。おおうつ！ 俺が考へてる間
にセレンはツンデレレベルを上げていたらしい。だいぶいいツンデ
レだつたぞ！

「マジっすか！ ？ でもこじり泊つてたのわけにはいかないからそろ
そろ行こうと思つ

「そう言つとセレンはショボンとした顔になつた。

分かりやすい表情だな～

「で、提案なんだけど、セレン、お前も一緒に来ない？ 俺はこの世
界についてよく知らないし、何よりお前と離れるのも寂しいしさ～
ホントのこじり泊つてコイツをこいつのまま放つておけないからなんだけ
どな。

…………あとボケとシッ「ミ」を一人2役やるのが大変という理由もあつたりする。

「な、なに言つてんのよーま、まあ、そんなに言つんなら一緒に行つてあげない」ともないけど、「

とは言つものの、セレンの表情は喜色満面といつた感じだつた。
「じゃ、早速出発！と、いきたいところだけどお互に準備もある
だろ？から、出発は今日の正午。ギルド前で」

「分かつたわ。じゃあ、またあとで」

今街の時計は10時15分を指している。

「さて、何を準備しようか」

まずは食料と思い、スーパーみたいな所に入る。いつにもスーパーつてあつたんだね…

中は野菜や干し肉ばかり、といつことはなく、冷凍食品とかインスタント食品、缶詰め、お惣菜までもが売られていた。

確かに旅には便利だけども、何かちがくね…？せつかくの異世界なのに普通すぎでしょ。おい作者、俺のこの気持ちどうしてくれれる。

スーパーで水や、保存が効きそうな缶詰め・インスタント食品を買つて、俺は図書館へと向かった。

上の段落だけ見たら俺が異世界にいるなんて誰も思わないだろうな。図書館へ向かつた理由？それは異世界に来たら魔法を習得しないと。KY女神は前にこの世界には魔法があるつて言つてたからな。

((あるよ~))

((おおう、久しぶりに出たなKY女神。セレンに活躍の場を取られそだから慌てて出てきたな?))

((違う違う。今日はあなたに連絡があつて繋いだの))

(（連絡？何）？）

(（今日から出張があつてさへ、しばらべの間繫がらない所にいる

から連絡は出来ないよ？）

(（遂に作者がリストラを始めたか））

((ラスト) 還^{もど}う! 出張^でで^いたでしょ! 戻^{もど}なくなるのは少^{すこ}し

たけたよー！！

(分かたる 分かたから落せ着けと JN て 話 魔法で)

モウソウの、(一)

(（ちなみに俺の魔力はどの位だ？そして増えることはあるのか？）

（（あなたの魔力量は…平均的な魔術師くらい。一般人よりは高いかな。あと、魔力っていうのは身長みたいなもので、あなたくらい

の年齢で魔力の増加は止まるんだよ

(（それだけ分かれはしゃせ
じや出張頑張れよ）

あつ、交言切つちやつた。ま、いつか。話してゐる間に図書館にも

着いたし、早速入りますか。

図書館の本はガラス並に因んで壁には本がキッシリ詰まっていた。

これだけの図書館元の世界じゃ見たことないそ

こりゃ探すのも大変だ
と思ったら検索用のハンマーを見つけた。見つけてしまった。

夢壊しそうだチクショーツ！！

まあ、便利なことには違ひがないので、俺はパソコンで『魔法』と打ち込み、魔法に関するそれっぽいのを探す。パソコンで調べた本を取つてみる。

『魔法のように相手を惹きつける10の方法』

はつ！つい自分の興味のある本を手にとってしまった。まさに魔法だ。

『初級者の魔法』

今度は眞面目に取つて来ました。

『第1章 まずは魔法について正しい知識をもとつ。・・・』面倒くさいので読み飛ばす。

『第2章 ジヤ次、魔力がなんのかやつてみようよ。・・・』わざわざ聞いたから読み飛ばす。ってかだんだん馴れ馴れしくなるな。

『第3章 魔法を使う時の注意、は後で他の本読んで学んで』2行で終わつたアアア！！後でこの本の著者に文句言つてやる。

『最終章 簡単な魔法を使ってみよう！』これこれ、ジヤ、早速学びますか。

『・サンダー 対象に雷を落とす魔法。

使い方：適当に詠唱して雷のイメージが明確になつたら「サンダー」と唱える。

・ファイヤー 対象を炎で燃やす魔法。

使い方：適当に詠唱して炎のイメージが明確になつたら「ファイヤー」と唱える。

・アイス 対象を氷漬けにする魔法。

使い方：適当に…以下略

・ウインド 細かい刃の風を起こす魔法。

使い方：適当に…以下略

・フォースグラビティ 重力をあやつり身体能力の強化、敵の

無力化に使用する上級魔法。

使い方：使用する場所の標高などから、大気圧、位置エネルギーを計算し、それに見合った重力を計算し、その計算結果以内の重力を対象の周囲1メートルの範囲で操作する。詠唱は「太古より流れたる大地の力、我の魔力を礎として今ここに具現せよ。（発動する場所の緯度経度を正確に言つ）。フォースグラビティ」である。まあ、ファイト。』

だそうだ。つてか突っ込みどころ満載過ぎだろコレヒエッ！！！
誰だよ著者。

『著者 誰かの何か』

作者アアアアアアアー！！ふざけんじやねええええ！！だいたいお前はな、（しばらくな待ちください）なんだよ。つたく、気を付けてくれよ？

もうお別れの時間？じゃ、あの後の行動をササッと纏めますか。

あの後俺は中級魔法も習得して、上級魔法もと思ったが、上級魔法は難し過ぎて分からなかつたので、とりあえず図書館を後にした。その後俺は武器屋に行つて武器を買って、ギルド前でツンデレと合流した。こちら辺はまた次の話で…

8 なんか、旅に出ます（準備編）（後書き）

次回予告

潤「何で俺が食料を買ったかって？そりゃセレンにお金を借りたからですよ～。そういうば魔法覚えたよ魔法。どんなもんのか今から楽しみだな～。・・・忘れてた、次回は武器屋行ってギルド前でツンデレと合流して旅に出ます。つて事で次回もよろしく」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（前書き）

0時に間に合わなかつた…

9 なんか、旅に出ます（出発編）

「お待たせ~」

予定の時間より15分早く、ギルド前に着いたが、そこには既にローブを脱いだ寧にフードまで被つて着ているセレンが立っていた。

「遅いわよ！私なんか1時間前からずっと居たのよ~」

もう一度言うが俺は遅れたわけじゃない。ってか早いな！1時間前つて、今11時45分だから10時45分には居たのかよ。30分で準備終わつたのか。

「悪い悪い。待たせたついでにもうちょっと待ってくれない？」

「何よ、まだ準備終わつてなかつたの？」

「ちょっと約束があつてさ~」

「まつたく、わざわざとしてよね~」

「サンキュー~」

さてさて、約束通りセレンと合流するまでの回想をしますか。

図書館を出て俺は武器屋へと入つていった。

カラコルという街は貿易都市と呼ばれるだけあつて（6話にじゅうひとつだけ書いてある）武器の種類は豊富だ。

剣、鎌、槍、ロッド、ハンマーなどたくさんあつた。

ちなみに俺は魔法で戦つていいと思うのでロッド希望だ。前衛後衛のバランスを考えてもセレンは明らかに前衛だからな… というのは建て前で、ホントのところは怖いからだ。命の奪い合いなんて元の世界じゃしたことないし、相手の命を奪つことに躊躇して殺されるかもしれない。そんな前衛に少女であるセレンを出すのはどうかと思うが、じつちの世界で戦ってきたセレンの方が俺より適任だ。

いすれは俺も最前線で仲間を守れるようになりたいが…まあ、今こんな事を話してもしょうがない。

さて、この店にあるロッドだが、

- ・天雷のロッド（雷強化） 1万ワロ
 - ・業火のロッド（炎強化） 1万ワロ
 - ・氷雪のロッド（氷強化） 1万ワロ
 - ・風斬のロッド（風強化） 1万ワロ
 - ・店先に落ちたロッド 1ワロ
- が、主なロッドだ。ちなみにワロといつのはこの世界の貨幣で、スーパーで100円で買えそうな缶詰めが10ワロだったから1ワロ10円と思つてくれて良さそうだ・・・・もう突っ込んでいいよな？最後のつて商品なの！？売る気ゼロだろー！

「すいません」

俺が店員を呼ぶと、店の奥から若い男性が出てきた。

「どうしたつすか？」

□調輕いなこの人。

「この『店先に落ちたロッド』って何ですか？」

「ああ、それですか？それは先週1日の仕事を終えて店をしまおうと店先に行つたら『持ち主を見つけてやつてください』っていう張り紙と一緒に落ちてたんですよ。で、一応誰かが持ち主になつてくれるようになつてるんですよ」

変わつた人も居たもんだな

「へへ、じゃあそれ俺が買つてもいいですか？」

「ワロだしな。損はしないだろ。

「へい、まいどあり～。代金はワロつす」

1ワロスー？と、つい反応してしまつた俺だがすぐにこの人の口癖と理解する。

「はい、1ワロス」

しまつた～！…そんな事考えてたらつい言つちまつた～！～

「？ ありがとうございました～」

良かつた。店員は無視してくれた。

さて、時間もちょっとどうじいし、ギルドに行きますか。

つて感じでした。

「サンキュー、終わつたぜ」

「終わつたぜって、あんた何もしてなかつたじゃない」
変なの、と半眼で見られてしまつた。

「さて、準備が整つたわけだが、どこに行こつか

「え！？そんな事も決めてなかつたの？ホント馬鹿ね！」

「ごめんなさい。じゃ、どつか静かな村みたいなのつてある？」
この街は人が多くて住むには落ち着かない。

「この辺りだつたらキルファ村かな？カラコルから南東へ3時間
くらいういた所にあるわ

「じゃそこにしますか。それではそれでは、出発～！」

「ちよつと待つた

歩き出した俺の首ねつこを掴まれて立ち止まる。

「どしたの？」

「どしたの？じゃないわよ！まったく…街を出たらいつ魔物に遭
遇するか分からぬのよ！戦う時のこと考えないと」

ああ、そうか。今まで俺一人で戦つてたから全然気にしてなか
つたな）。反省。

「俺はロツド持つてることから分かるように魔術師。後衛で応援、
もとい支援がメインだな
いざとなつたら前衛でも頑張るけど」

「ちよつと良かつたわね。私は剣士で前衛タイプよ
「じゃ、戦闘がはじまつたら・・・・・・

と、打ち合わせをした。じゃ、今度こそ、「行きまですか~」

9 なんか、旅に出ます（出発編）（後書き）

次回予告

潤「いよいよ出発か～。オラ、ワクワクすつぜ。ええっと、次回は俺とセレンによる初めての共同作業。だそうです。どうせ戦闘だろ？期待させて落つことは作者の常套手段だからな……みんなも気をつけようよ～。」

10 なんか、相方が凄いです（前書き）

朝から何書いてんのと「うしづコリ」といつてはスルーの方向で…
学生は学校があるから早起きなんです

10 なんか、相方が凄いです

「どうも、この頃名字である羽山を使わなすぎて、「あれ?俺って何潤だったつけ?」つてなり始める羽山潤です。さてさて、前回はセレンと街を出て終わりました。では今、俺たちはどうな状況にいるでしょう?」

答えは簡単。ちっこいドラゴンだかでつかいトカゲだか10匹くらいと戦闘中(初めての共同作業中)です。おかしくなー。前回の後書きで作者の意図を見破つて戦闘フラグを回避したと思ったのに…

「ジュン!何突っ立つてんの!戦うわよ」

「だそうです。もう剣抜いてあるよ…やる気MAXだなセレン。

「へーい。じゃ、後衛で大人しく応援してるよ

「分かった。って、ちゃんと支援しなさいよー」

思わず後ろを振り返り俺を睨みつけるセレン。のリツチコモも出来るのか~優秀だな。

つてかトカゲ来てるぞ?前見ないと危ないんじゃ…しかしあのツンデレ剣士(略してつんけんなんてどうだろ?…どうでもいい?さいですか)は背後に迫ったトカゲを

「邪魔つ

と言つて振り返りもせずに斬り伏せた。

つてか普通に強くね?俺いらなくね?

「俺は今『いのちだいじに』つて命令が下ってるから攻撃の行動がこれなくて

と、某ゲームの作戦名を出して動こうとしない俺。

「何意味わかんないこと言つてんの?早く戦いなさいよつ!」

トカゲを斬つては捨て、斬つては捨てを繰り返して残りを3匹にしたセレンが言つ。もう戦闘にすらなつていない。

「分かったよ

つて言つた瞬間、空氣を読んでかトカゲが1匹俺に向かつてきました。

そういうことで俺も戦闘に強制参加。

じゃ、折角だし魔法使ってみるか。まずは詠唱してイメージを高めるんだっけ？

「え～、雷、電気、電池…」

と詠唱だか連想ゲームだかを始める俺。5こくらい言つてもういいかと思い、

「サンダー！」

つて唱える。すると次の瞬間、天から敵に雷が…なんて都合のいい展開は待つておらず、俺とトカゲの間にビリツと静電気くじりの電気が流れた。

・・・よ、弱え～。想像力が足りないっぽいな。

でも今の静電気でトカゲは苛立つたようで、真っ直ぐ俺に突っ込んできた。それを俺は大上段に構えたロッドをトカゲの首田掛けて振り下ろし、首の骨を折つて絶命させた。うん。結果オーライ。

さて、俺が1匹倒す間にセレンは残りの2匹を倒していく、初めての共同作業は無事終了した。

「ジュン、後衛なのに魔法が出来ないって…もしかして弱い？」

まあ、魔法使つたのも初めてだし元々前衛タイプだからな。とは言わずに、

「はい、こっちの世界に来て田が浅いもんで」

と言つておく。嘘ではないからな。とにかく非常時以外は後衛でのんびりしてたいし。

「ジュンの世界は平和だったのね。まあいいわ。しょうがないからジュンも私が守つてあげる」

ニヤニヤしながらそう言つてきた。セレンにしては珍しい表情だなどおもいつつ、断る理由もないつてかむしろ大歓迎なので、

「よろしくお願ひします」

とだけ言つておいた。

ちなみに今俺たちはカラコルから南東に2時間ほど進んだ所にい

る。つまりあと1時間ほど進むと村に着くのだ。今まで魔物はさつきの集団以外見かけていないので、この辺りに魔物は少ないのかセレンに聞いたところ、「そうね。街道が整備されてるから遭遇するることはめったにないわ」らしい。

本題はここからだ。残りの道のりは街道の整備されていない森を行かなくてはならないらしい。当然魔物もうつじやうつじや…今から気が重いぜ。

「じゃ、行きましょ」

といふ言葉が「じゃ、逝きましょ」に脳内変換されたのはしきりがない事だろう。うん。

「魔物に会わないように祈つときますか」

そう言い、俺たちは森の中へと入つていった。

10 なんか、相方が凄いです（後書き）

次回予告

潤「うわ～次回は・・・森とか憂鬱だ～。どう考へても戦闘がある
でしょ。森林浴で終わるわけないもんね。何の嫌がらせだ作者。あ
と電車の中だからつてコソコソとスマホ使って打つの止めろよ。次
からは堂々と打つよ～に！～」

11 なんか、地面から出てきました（前書き）

魔法使っちゃいます。

11 なんか、地面から出でました

やつてきました。森の中。まだ日が出ていなはずなのに中は薄暗い。虫もいっぱい。しかもジメジメして。うん、最悪だね。

「まーだー？」

セレンに聞く。

「まだよつ！うつさいわね！！」

大分厳しい言い方…もつと優しくしてくれてもいいじゃん。ツンツンめへ。

「すぐに怒るなんてカルシウムが足りないんじゃないかい？」

牛乳嫌いな俺が言えたことじゃないけど。

「森に入つてから5分おき位に言われてれば誰だつて苛立つわよ！ジユンの方が我慢が出来ないなんてカルシウムが足りないんじゃない？」

言い返されてしまった…読者の皆さんだつて俺の方が正しいと思うでしょ？え、お前が悪いから謝れって？俺が間違つてたの？そうだつたのか～。

「セレン。脳内会議の結果、俺が悪いと分かつたよ。悪かった」

そう言つとセレンは顔を赤く染めて、

「わ、分かればいいのよ。変なジユンね！・・・私も言ひ過ぎた、『じめん』

と返した。最後の方はよく聞こえなかつたが、俺の情報（もちろんラノベですが？）によると聞き直さない方がいいとなつてているので無難に、

「お、おづ。今度からは氣を付ける」と言つておいた。

こんなやりとりをしていたら森を抜けていた。うん、太陽つて素晴らしい。あれ？ そいつえば1回も戦闘がなかつたな。俺の予想の常に正反対を貫きやがつて、作者の天の邪鬼め。

あとは平原を5分ほど歩けば、歩けば…

「何で村だつけ？」

誰にでもど忘れはあるよね。あくまでもど忘れです。忘れているわけではありません。大切な事なので2回言いました。

「キルファ村よ。300人位の人が住んでる小さな村。周囲を大きな川と森で囲まれているから基本的に自給自足で成り立っているわ」

だそうです。

「ありがとう。助かつたよ」

するとセレンは顔をさつき以上に

真っ赤に染めて、

「ふ、ふん、常識よつ！ ジュンも早く覚えてよね！」

と言つて早足で前に進んでしまつた。可愛いヤツめ。

俺は「善処する」と言つて歩みを進めよつとした。そう、進めよう（・・）とな。

（地面の下に何か居る！？）

咄嗟に気付いた俺はセレンにも声を掛けた。

「セレン！ 下から何か出てくるぞ！！」

俺の言葉にセレンは、え？と反応をし、ヤツに気付いたのか走り出すが、ダメだヤツの方が速い

。（ヤバい、このままだと間に合わねえ）

何故か知らんが地面の下のヤツの狙いはセレンだ。ショウガねえ。

「安定する体勢になつて剣の腹をこっちに向ける！」

セレンは有り難いことにすぐに行動に移してくれた。間に合つか…

「凍りやがれ！ グランドアイスツ！ 吹き荒れる！ テクノウインド！」

中級氷魔法を詠唱してセレンの足下やその周囲50メートルの地面を凍り漬けにする。その後に詠唱したテクノウインドという中級風魔法を、セレンの剣の腹に1点集中させると瞬間に遠くまで滑らせる。

セレンが滑つていった直後、さつきまでセレンがいた場所の地面から氷を突き破つて直径2メートル位のやたらでかい縁のワームがでてきた。

（なんとか間に合つたな。正直魔法に頼るのは賭けだつたけど）ちなみにさつき使つた魔法。グランドアイスはアイスの1っこ上の魔法で、地面を凍らせる範囲魔法。テクノウイングはウイングの1こ上の魔法で、対象に鎌鼬をぶつける技だ。今頃セレンの剣はボロボロだろう。後で謝んないと。ちょっと飛ばす方向間違えちゃつて、セレンが木にぶつかつて気絶したのは俺と読者の皆さんとの秘密だ。くれぐれも作者にばれないようにな？

「デカブツめ。よくもセレンを吹つ飛ばしたな！ 覚悟しろよ？」
皆さん、頼むからそんな目で俺を見ないで。・・・新しい境地に目覚めちゃう。

グオオオオア！！

ワームが待ちかねて吠え出しちゃつたよ。じゃ、冗談はこじら辺にして、

「俺がセレンを氣絶させたのをお前は見てたからな。悪いが口を滑らせないよう殺させてもらつぜ」
え？ 悪役になつてるつて？ バカ言つちやいけませんよ。俺は善良な一般ピーポウ（ネイティヴっぽく）ですよ。
つて、また冗談始まっちゃつたよ。俺の意志は生卵よりも柔らかいな…ま、いつか、俺らしいし。

グオオオとワームがこっちに向かつて突進してくる。ハッキリ言つてめちゃくちゃキモいっすワームの兄さん…
さて、あれだけでかいと物理攻撃は効きそつにないな。魔力もまだ余裕があるから魔法で戦うか

あ、そうそう、気づいてる人も多いと思うけど、今回はここまで。後書きに俺が習得した魔法を載せとくから、それでも読んで予習しつつ次の投稿をお楽しみに！

どうした作者？え？魔法の説明に文字数使いそุดだからここで次回予告しどけつて？ハイハイ、了解。

潤「次回予告なんて誰得なコーナーだよ、と最近思い始めている潤君です 次回は皆さん想像通り、ワームとの戦いです。一刻も早く倒して俺の心の安寧を取り戻せ！」

11 なんか、地面から出てきました（後書き）

（魔法一覧）

『下級魔法』

- ・サンダー 対象に雷を落とす魔法。のはず。本編じゃ残念な結果に…

- ・ファイヤー 対象を燃やす魔法。外で料理するときに便利。
- ・アイス 対象を凍り漬けにする魔法。風邪を引いたときにも使えるぞ

- ・ウインド 対象を細かい風で切り刻む魔法。キャベツの千切りにもつてこい。

『中級魔法』

- ・サンダーブラッジメント 10～20個の雷球を対象の周りに浮かべ、任意のタイミングで一斉に雷球から雷が対象目掛けて飛んでくる。

- ・サンダーボイル スーザン・ボイルとは関係ない。サンダーブラッジメントの派生系。10～20個の雷球を一つ圧縮し、対象にぶつける魔法。

- ・ファイヤーワール 別に何かのシステムの名前じゃない。炎の壁を作り出し、任意のタイミングで倒して対象を焼き尽くす。防御としても使える。

- ・ダークネスファイヤー ファイヤーワールの派生系。炎自身をも焦がす温度の黒い炎を対象の地面から柱状に発生させる魔法。
- ・グランドアイス 対象の足下を中心に半径50メートルの地面を凍り漬けにする。

- ・ピアシングアイス グランドアイスの派生系。対象の足下を中心半径30メートルの地面からドデカイ氷柱を出現させる魔法。
- ・テクノウインド 対象を鎌鼬で四方八方から切り刻む魔法。潤

君は頑張つて1点集中させました。

- ・ウインドバースト テクノウインドの派生系。自分を中心半径10メートルに鎌鼬を起こす。これも防御にも使える。
- ・デイザスカラスクエイク 対象の地面をひっくり返す魔法。農業に使えるかも。

12 なんか、シリアルです（前書き）

何か最終回みたいになりました。

12 なんか、シリアルズです

さて、前回は微妙なところで終わってたから、ワームが突進してい
る途中という気持ち悪い画からスタートする。

つてか早いとこどうにかしないと喰われそうだ：

「燃やし尽くせ！ ファイヤーウォール」

俺の目の前に高さ10メートル横5メートルくらいの炎の壁が出来上がる。熱く感じないな。術者に対する安心設計か？

俺気付いたんだけどさ、下手に長い詠唱するよりもせりと詠唱した方が上手くいくんだよね。たぶん俺の場合、ラノベとかゲームとかでこういうイメージは身近に有ったから、変に意識するとかえつてイメージが霞んじゃうんだろうね。

さて、そろそろ間合いに入つたな。

そう思い、俺は心の中で倒れろ～って念じた。
すると、炎の壁は俺の思い通り倒れ始めた。

・・・「こっち側に…つて、ええええツ！？」「こっち側！？何でこんな時にギヤグ発動してんだよ！ちよ、まつ、や、やべえ！

と、俺はどうすることも出来ず、あたふたと慌てる。

どうするどうする、と考えに考えて、俺はもう一つの防御にも使える魔法『ウインドバースト』を唱えることにした。

「我を守りし聖なる風よ～マジで頼みます！ ウィンドバースト」

ゴウツという音と共に俺の周りで風がうねった次の瞬間、凶悪なまでの風が周囲の草花とファイヤーウォールの炎を刈り取った。ワームも例外ではなく、動けばするものの、身体から体液が漏れ出してグロさ当社比2倍である。

・・・「」の魔法強過ぎだろ

そんなことを考えていたら、ワームが口に向けて何かこそそと行動していた。無傷で。

「何でこんなに生命力が有り余つてんだよーー1発で倒せつてか?いいぜ、やってやろうじゃないか。」

「言つても使える魔法はあと2回が魔力の限界だな。どうするか…と考えていると、こそそしてたワームの口から変な液体が俺に向かつて飛んできた。

テンプレだな。この手の攻撃は酸か毒で、触れるのはもちろん発生した気体を吸つてもアウトってパターンだろ?」「見え見えだぜ!」

と、軽く飛んできた液体を避ける。・・・移動した先に地面から出したワームの尻尾があると氣付かずに。

俺はヤツのめちゃくちゃ重い一撃を食らひてしまつた。チクショウ、こそそしてたあの時か…

その後もヤツは俺で遊ぶかのように尻尾で俺を木に叩きつけたり、空中に放り投げて尻尾で叩き落としたりしていた。

「やつべ、身体が動かねえ…」

恐らくあばらが何本かいつてしまつただろ? 内臓ももうボロボロだ。思えばこっちの世界に来て初めて怪我したな…はあ、もうすぐ俺は死ぬのか? 思つたよりあつけなかつたな…いや、まだあと一つやり残したことがあつた。

「俺にはな…まだ死ぬわけにはいかねえ理由があんだよ…!」

恐らくこの言葉はワームに対してもう言いたいことだらう。「俺が死んだら誰がセレンをワームから、いやこの世界から引つてんだよ!」

そう考へ俺は自分の身体に鞭打つて無理やり立ち上がる。「デカブツ、今から俺の最大の一撃を叩き込んでやる。・・・かか

つてきな

その言葉を理解したのかは分からぬがワームは俺に向かつて突進してきた。ヤツも決着を付ける気だろ？

俺は口の中に溜まっていた血を吐き出しつつ、全身で魔力を巡らせる。身体強化を図る。

そして残った魔力を右手に集めて刀のような形状をとて黒かつたんだな。見たこと無かつたから知らなかつた。

さあ、決戦の時間だ。

ワームが俺の目の前にまで迫ってきて、俺の身体の呑み込まんとして、何重にも重なった歯を持つ口を大きく開く。

俺はワームの頭と思われる辺りまでジャンプした。身体強化

ワームは一瞬混乱したが、すぐに俺の場所に気付いた。しかし、俺にはその僅かな隙だけで充分だった。

一食らいやがれええええツ！！！！！」

魔力でできた黒い刀はワームの脳天から突き刺さった。
もう動かないし殺せたんだろう。

・・・ダメだ。意識が、遠の、く。

12 なんか、シリアルです（後書き）

次回予告

転生の女神「どうもどうも、久しぶりね～。最近出れてなかつたけど主人公が生死不明って事で今日は私が次回予告をします。つかヤバかつたね～。潤君大丈夫かなあ？最終回にならなきやいいけど…とりあえず次回は潤君が生きてた場合は潤君視点で何かするんじゃない？とにかく、次回を見てみないと分かんないわ～」

13 なんか、生きてました（前書き）

潤は爆発すれば世の中平和になると思つ

13 なんか、生きてました

「ん、ここのは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見当たらないから真っ白い空間か？

・・・あれ？この文章。それにここの空間。何か俺は知ってる気がするぞ？

「あつ、起きた？」

そこには、セレンではない見知った顔がいた。

「お前はＫＹ女神！ そうか、ここは転生する直前の大空間だ～」

でも何でここに居るんだ？

「転生の女神だけどね… あなたはワームと戦つて死にかけてたから私が空間転移で運んで復活させたの」

ワーム、ワーム・・・はつ！

「セレンは？ セレンは大丈夫だったのか？」

「復活して早々に彼女の心配とは、二クいねコノコノ～」

「そ、そんなんじやねえよ！ で、どうなんだよ？」

こんな時に顔を赤くするのはセレンのはずなのに何故か今俺は顔が熱い。きっと顔が赤くなってるんだろう。

「彼女なら無事だよ」誰かさんがいなくて泣いてたけどね～」

KY女神がニヤニヤしながら言つてくる。

そうか、俺がいなくなつたことに泣いてくれたのか… 申し訳ない気持ちもあるけど何か嬉しいな。

「で、そろそろ戻りたいんだけど」

「どっちの世界に？」

「はい？ どゆこと？」

「今なら元の世界と異世界、どっちか好きな方に戻してあげ…」

「異世界だな。考えるまでもない」

俺がそう言うとKY女神は意地の悪い笑みを浮かべて、

「異世界には未練をたっぷり残してきたんだね」「

とか言いやがった。まあ、ホントのことなんだけど。

「う、うるさいな、早く転移してくれよ」

「ハイハイ、あ、あとこれはアドバイスね。もつと強く、仲間を守れるくらい強くなつたら古の神々の神殿つて所に行くといよ。あなたの為になる何かが置いてあるから」

「おう、サンキューな。お前は今まで会つた女神の中で一番の女神だ」

「ホント? ありがとう。困つたら何時でも呼んでね」

女神なんてお前以外見たこともないが、嘘は吐いてない。嘘は。

「つて、お前呼んでもほとんど居ないだろつー?」

転移が始まつたのか俺の身体が薄くなつてきた。

「嘘は吐いてない。嘘は

「イツ…俺の考えまで読んでやがつた。プライバシーの侵害で訴えてやるつかな。

そんなことを考えていたら一つの間にか異世界に着いていた。

「ここは…ワームと戦つた場所か

そこにワームの死体はもう無く、俺がウイングドバーストを使った痕だけがぽつかりと残つていた。

((着いた))

「の声はKYOU女神か。

((おう、着いたぞ。セレンはキルファ村に居るのか?))

今は一刻も早くセレンに会つて安心させたい。

((うん。村に居るよ))

((分かった。じゃ切るぞ。・・・覗き見るじゃね〜ぞ))
ぐきを差しとかないとやりかねないからな。

((ソ、ソンナノアタリマエジヤナイ))

分かり易つ!!女神酷く分かり易つ!!

キルファ村に入つたはいいが、セレンがビニにこむのが分からん…
片つ端から行きますか。

村自体は広くないので一人田にて尋ねてセレンがビニに面するかすぐ
に分かつた。どうやら宿屋に居るらしい。

宿屋2階のセレンの部屋の前まで来た。第一声はどうじよつか、
セレンは怒つてないだらうか。そんな余計なことばかり頭に浮かぶ。
(しつかりしろ！羽山 潤！何を怖がってるんだ)

自分を叱咤激励して部屋へと入る。中にはイスに座つてどこか暗
い表情で床を見つめていた。

「セ、セレンさん？ セレン？ セレン？」

なかなか気付かずないな…

「セレンってば」

少し強めに言つてみる。

「？、！？」

あ、気付いた。セレンはまるで幽霊でも見たかのよつて口を開け
パクをせている。いや、金魚にも似ているな…いやいや、よく考え
てみれば口をパクパクさせるのはなにも金魚に限つたことじやない。
魚であればあの行動はみんなやつている。だとすれば魚のよう
と言つべきか？いや、それは抽象的過ぎだらう…

おつと、セレンの心理戦で危うく思考の深みにはまるとこいつだつ
た。セレン、恐ろしい娘つ！

「ジ、ジュン？」

あ、あれ？ もしかして忘れられてる？いやいや、まだ数日しか経
つていなければだぞ？

「俺のこと、ご存知ですよね…ほら、数日前まで一緒に…」

「ジュン…！」

そう言つて（呟んで）セレンは俺に抱きついてきた。俺はビシ
クリしておもわず、

「は、はい。確かに潤は俺のですよ」

ところ変なことをこいつしてしまった…本当は「潤は俺の姉前ですか
つて言ひははずだったのに。」

「今まで何処行つてたのよ！バカッ！」

「グハアッ、涙目 + 上田遣いは反則！審判、早く反則とつてよ。こ
のままじゃ俺の心臓に良くない！」

「ど、とりあえず一旦離れて、お、落ち着こつじや、じゃないか」「
まあ俺が落ち着け～！と思わず自分に突つ込んでしまつたのは秘
密だ。

「つーーーー、ごめんなさい。つーーーー」

「いこつて、と言つて一回落ち着く。すーはー、すーはー。よし。
「今まで何処行つてたかだけど、友達に拉致られて、しばらく療養
してた。おかげですっかり元気になつちゃつて」

「ハハハ、と笑つて誤魔化す。それに対してセレンは「ふ〜ん。無
事ならいいわ」と言つていた。

その後、俺たちは氣絶した後どうなつたかそれぞれ話し、その日
は宿で寝た。か、勘違ひしないでよねーちゃんとお金は払つたんだ
からね！

「うーん、俺にシンデレの才能は無さうだな…

13 なんか、生きてました（後書き）

次回予告

潤「次回予告に復帰したぜー！あと誰だ前書きにあんな事書いたの！？どうせ作者だらうけどな…さてさて、次回からは、またいつも通りの日常にもどります。俺はこれからキルファ村でなにをしていくのかな～」

14 なんか、違法な気がします（前書き）

説明回です

14 なんか、違法な気がします

「セレーン、今日は何をしようつが」

金が無くなつてきたから働かなきゃいけないし、セレンの剣も買わなくちゃいけない。あと魔法の研究もしたいし……やるべきことこの事欠かない。

「そう言つことはまずベッドから起きてから皿になさい」

セレンは一蹴されてしまつた。だつてベッド気持ちえへやん。

「俺はベッドから起きよつとしたてるんだ。ナビベッドが俺を離したくなつて起きかなくて……」

「…………」

「…………」

「…………」

なんかあざ笑われたアツ！

「しようがない、起きるか」

セレンは言つて掛け布団を持って起き上りが、ひつとじて止まる。

「ど、どひしたの？」

体調でも悪いのかと、セレンが心配でついつい聞く。

「ベッドじゃない！」

「え、え？ どうしたの？」

突然変なことを言つて出した俺にセレンが一層混乱してゐる。
「だから、ベッドじゃなかつたんだよ。セレン」「何がよ？」

俺の真剣な表情を見てセレンも真剣な表情で聞き返す。

「本当に俺を離したくないのは・・・掛けぶ…」

スローンとこつ音を伴つて頭を叩かれる。まだ最後まで言つてなかつたのに。

「私の心配を返しなむよーーーわかつ起きなむよーーー」

「分かつたよ、お母さん」

「私はおぬせんじやないわよ！バッカじやないの？」

そう言つてセレンは部屋を出て行ってしまった。

「・・・起きるか」

一人でやることもないもので起きよひとする。が、今度は本氣で起きれない。この感覚、覚えがあるぞ。確かにその時は周囲の風景が動かなかつたんだが、つてことは

「作者アアアツ！お前か！面白い事いやがつて」

このままじや俺がまたふざけてるようにならぬか見えないじやねえか！こや、マジで、次はマジでヤバいから。ちゃんと異世界旅しますから～！

作者様お願いします。

おつ、動けるようになつた。さて、今後の方針も旅をするつてことになつちやつたな～。セレンに言つてくるか。

「つてことでもた旅に出る」となりました

正直に話しました。作者からお告げがあつたと、
「へ～、作者がね～。つて、作者つて何のことよ～ふざけてないで
ちゃんと方針考えて！」

だらうね。こんな反応だつて分かつてたさ。
「ホントなんだつて～。とりあえず適当に旅しようぜ。世界一周すれば作者も満足だらうしさ」

「世界一周つて、どんだけ長い旅する気なのよ。まつたく、まあ、
いいわ。付き合つてあげる
なんとか了承してもらえた。

「でもその前に私の剣をどうにかしてね」

・・・そうでした。今セレンは武器持つてないんだった。
「じゃ、そのための金をササッと稼ぎますか

つてことでもつてきました。ギルドです。

セレンは外ではローブを着てフードを深く被つている。大変なんだな…

ギルドに加入するために、前回の俺の失敗を生かして今回は秘密兵器を持ってきたぜ。

「すいませ～ん、ギルドに加入したいんですけど～」

この村のギルドの受付は可愛らしい女の子だったので、俺のモチベーションは上がりっぱなしなのはセレンには絶対に秘密だぞ。

「ではこちらに身分証明書と経歴を提出して下さい」

前回はここで失敗した訳だが、今回の俺は一味違うぜ！

「これですね。どうぞ」

そう言つて俺は2人分の身分証明書と経歴を出す。・・・偽物のな。

本来この世界では身分証明書は国から発行してもらうのだが、俺はカラフルの街のギルドで身分証明書の形状、デザインをこつそり覚えた。それなりに時間は掛かったがバレないようなものが出来たと思う。違法な氣がするのは気のせいだろう。

「確かに承りました。兄妹でのご登録ですね？お兄さんはウェル・カラーラーさん。妹さんがセラフィ・カラーラーさんでよろしいですか？」セレンのア承も得ているのでなんら問題はない。

ちなみに俺の偽名ウェルは潤つているという意味のウェルシーからとり、セレンは天使のような美しさと気高さを持っているということでセラフィックからとった。

「はい。間違いありません」

偽名だけどね。

「ではギルド加入を承認します。ギルドの説明は必要ですか？」

俺はもちろんセレンもギルドには入っていなかつたので知らないだろう。

「お願いします」

「了解しました。まずギルドについてですが、ご存知の通りギルド

はほとんどの街や村に存在しています。そしてこの…」

と言つて受付の女の子は机の中からクレジットカード大のプラスチックっぽいカードを出した。

「このギルドカードがあれば、どのギルドでも依頼が受けられます。逆に無くしてしまつと作り直しなつてしまいますが無くさないようになります。これはあなた方のギルドカードです」

そう言うと、彼女は俺たちにギルドカードなるものを渡した。

「次に依頼についてです。依頼にはE～Sランクまであり、D～Eが初級冒険者向け、Cが中級冒険者向け、A～Bが上級冒険者向けとなっています。あくまでもこれは目安ですので、初級冒険者が上級冒険者向けの依頼を受けることも出来ます。しかし依頼は失敗してしまうと違約金を払わなければならなくなり、下手すると命を落としかねないので、自分の身の丈に合つた依頼を受けるようにしてください。あとSランクについてですが、Sランクの依頼はプロミネットギルダーという、冒険者のトップ10に入らないと受けられません。プロミネットギルダーになるには現在プロミネットギルダーである人をギルド立ち会いの下で倒すことが条件です。ですがプロミネットギルダーは実質世界最強の10人なので年老いるまでは無理だと言われています」

途中からそのなんちゃらギルダーの話になつていてますよお姉さん…

とりあえず俺はD～Eランクの依頼をやって稼げばいいんだな。

「最後に冒険者同士の共闘、パーティーについてですが、これは特にギルドに申請する必要はありません。パーティーに入るか入らないかは自由ですが、依頼達成時の報酬は変わらないので人数を多くするとその分1人あたりの報酬は少なくなります。以上がギルドについてですが、何か質問はありますか？」

パーティーはセレンと2人で組めば充分だろう。あとは…

「依頼の達成はどこで報告すればいいの？」

と、セレンが質問する。確かに、どうすればいいんだ？

「依頼を完遂したら、私たち受付の者に報告すれば依頼達成となり

ます。その時に魔物なら特定の部位、採集なら採集した物、配達なら領収書を提出していただきます

なるほど、インチキは出来ないと。

「他に質問がないようでしたらこれにて説明を終了させていただきます」

セレンは?と顔を見るが、質問は無いのか首を横に振った。俺も特にならないな。

「大丈夫そうです。ありがとうございました」

「はい。ご活躍をお祈りしています」

そうして俺たちは受付から離れた。

「さて、依頼を受けますか」

14 なんか、違法な気がします（後書き）

次回予告

潤「せつかくのんびりいこうと思つてたのに…作者の奴め、怨んでやる。さて、ギルドで説明も終わつて次はいよいよ依頼を受けるぜ！って言つても簡単なのしか受けれる気はないけどな」

15 なんか、反戻ぬです（前書き）

殺すとは、死にこなれと

15 なんか、反則的です

「依頼、依頼」と

俺たちは今、依頼が提示されている。掲示板の前で依頼を探している。

「これなんか良さそうじゃない?」

と、セレンが俺に依頼用紙を見せる。

『Dランク配達依頼』

キルファ村のギルドに預けてある小包をカラコルの街まで運んでほしい。

報酬：3000ワロ

注意：中身は割れ物なので、慎重に運んでほしい。中身が割れてしまったり傷ついてしまった場合報酬は減額。

「ん~、確かにカラコルは一度行つてるから分かるけど…セレンは剣がないから戦えないし、この前みたいに魔物に襲われたら危ないんじゃない?」

つてか久しぶりにワロつて聞いたな…

「それもそうね…じゃあこれは?」

『Eランク雑務依頼』

キルファ村の宿屋で模様替えをする。その手伝いをする。

報酬：1000ワロ

注意：お好きな物も動かすので力のある人でお願いする。人数は1人のみ。

「人数が1人までかあ、いい依頼だけどな？」

まあ、あの宿屋小さかつたし、人数が居ても邪魔なんだろ？。

「ならお互い別々の依頼を受けない？その方が効率もいいし」

「そうだな。じゃあ俺は自宅警備員として部屋に…」

「ちゃんと働きなさい！」

言われてしまった。ちゃんとした仕事だと思つた…自宅警備員。
給料はもらえないけどな。

「へ～い。じゃ、どの依頼を受けようかな？」

「私はこの模様替えの依頼を受けるから、ジュンもちゃんと働きな
さいよ！」

そう言い残してセレンは行ってしまった。

「さて、真面目に決めますか」

そう自分に言い聞かせて、改めて依頼を見る。

（そう言えば、ワームを倒したときのあの戦い方、あれが実用的か
どうかやってみるか）

そう思つて魔物の討伐依頼を見た。

『Dランク討伐依頼』

キルファ村の南西でビッグリザードを確認。これを討伐してほし
い。

報酬：ビッグリザード1体につき500ワロ

証明部位：牙（2本1組とする）

注意：群れで行動するので周囲を警戒する。

写真があつたので見てみると、キルファ村に来る途中に出会つた

小さいドラゴンみたいなヤツだった。

ビッググリザードってことはトカゲだったのか…

何にせよ、そんなに強くない魔物だったので、この依頼を受けることにする。

「この依頼受けたいんですけど」

受付まで依頼用紙を持っていく。

「ビッググリザード討伐ですね。お一人で行くんですか？」

「はい、そのつもりですけど…」

「相手は群れで行動する魔物です。よければ1人くらい一緒に行く仲間を探しましょうか？」

今回は自分の力を確かめるためでもあるので1人で行きたいところだなあ。

「今日はいいです。ご親切にどうも」

そう言つと、受付のお姉さんは心配そうな顔になるが、

「分かりました。頑張つて下さい」

と言つてくれた。

「じゃ、行つてきます」

と俺が言うと、

「はい。逝つて…行つてらっしゃい」

と、言い直しながらも返してくれた。みんな、誤字には気をつけようね！

「あいつらか…」

そう言つた俺の視線の先には件のトカゲがいた。30匹位…

多くねッ！？前回セレンと戦った時は10匹位だったのに。予定変更。最初はあの黒い刀と身体能力強化だけで戦う予定だったけど、魔法で一旦数を減らそう。べ、別に自分の接近戦の力に自信がない

訳じやないんだからね…うざい？」「めんなさい。

「さてと、出来るか分かんねえけど…俺の魅力に痺れなつ…！サンダージャッジメント！」

普段じや恥ずかしくて言えないようなセリフを一人なので恥ずかしくなく言える。

ちなみにこのサンダージャッジメントは普通のとはちょっと違つ。普通は20個位の雷球を1体に集中させるのだが、今回は1個1個をビッグリザード1体毎に集中させた。おかげで制御が物凄い大変だ。

ビッグリザードも俺のことに気付いてこっちに向かってくれる。

「ああ、いくぜ！」

と気合を入れて、パチンと指を弾く。

バリバリッと音を立てて20個の雷球がそれぞれの標的に雷を放つ。初めて戦つた時のよつたな静電気ではないので、その一撃で20匹が絶命する。

「残り10匹！」

そう言つて魔力を身体に巡らせて身体能力強化をする。さらに右手に魔力を集中させて刀の形状をとらせる。

「ああ、いくぜ！」

と気合を入れて…え？ わつきと同じ」と言つてる？ そう堅いこと言わば。読んでやつてんだから文章を工夫しなつて？ いやいや、咄嗟に出ちやつたんだからしょうがないでしょ！？ そんな無茶振りされ…

グギヤーッと、田の前にビッグリザードの牙が迫る。

「危ねつ…！」

間一髪のところで避けて、後ろに跳んで距離をとる。

ほひ～、皆さんが邪魔するから危なかつたじやん。次からは気をつけよう。

「ふつ…！」

と、脚に力を入れて強化された脚力でビッグリザードに迫り、刀

を一閃。その一撃でビッグリザードは胴体が2つにさよならした。
身体が風のように軽い。俺は今、千でも何でもない風になつているようだフハハハ。

そんな事を考えていると、残りのビッグリザードが全て俺に向かつてくる。

「つはあつー！」

と、魔力を刀に込めて薙ぐ。すると、魔力が刃となつてビッグリザードたちに襲いかかり一瞬でその命を刈り取る。

・・・人に向けては使えないな。

何はともあれ、依頼は完了したので牙を取つて帰ることにした。
戦つてる時はそれどころではなかつたけど、可哀想なことをした
な、と今更ながらに思う。俺もいつかはこんな感じで人を殺めてしまふのだろうか、と少しブルーになりながらビッグリザードたちに手を合わせ、その場を後にする。

15 なんか、反則的です（後書き）

次回予告

潤「殺したものの分まで生きるのが俺の責任、か…ま、頑張りますか。さて、次回も引き続きギルドでお仕事だ。次はどんな依頼を受けようかな~。ん? 何か新たな出会いの予感」

16 なんか、巻き込まれました（前書き）

ギャグ成分が…足りない

16 なんか、巻き込まれました

「依頼達成ですね。では証明部位を提出して下さい」
あの後俺は身体能力強化を掛けたまま村まで軽く走って帰った。
1キロくらい離れた場所だったが、それを10秒程で帰れた。軽く
走つて時速360キロかよ…半端じゃないな。

つてか最近真面目な冒険っぽくなってるな…作者もギャグ成分が
足りなくて萎びてきてるぜ。お前は植物かっ！」

「あのお、どうされたんですか？」

作者のせいで、心配されけやつたじゃないか。え？ 責任転嫁だつ
て？「めんなさい。

「すいません。これが証明部位の牙です」

そう言つてビッグリザードの牙を60本出す。

「これ全部一人でやつたんですか！？」

お姉さんが信じられないような顔でこちらを見てくる。俺つてそ
んなに弱そうに見えるのかな…

「そうですけど…何か問題でもありましたか？」

まさか、殺し過ぎで動物、いや今回は魔物か…魔物愛護団体に訴
えられるとか？自分で言つていてなんだが、魔物愛護団体つて良い
人なんだか悪い人なんだか分からない団体だな。

「いえ、凄いなーと思いまして…魔物愛護団体が見たら発狂しそう
ですね」

居るんだっ！！魔物愛護団体ホントに居るんだっ！！

「ハハハハハ」

と、乾いた笑いしか出てこない。

「では依頼を達成しましたので報酬です。ビッグリザードの牙60
本なので30匹分、15000ワロです」

どうぞ、とお姉さんがお金の入った袋を渡してくる。

ありがとうございます。と俺は言つて受付を離れた。今はちょうど1時だ。あ、午後の1時な。当たり前？さいですか。

「あと1つくらい依頼は受けられそうだな」「さつきの依頼も2時間くらいで終わつたし。

というわけで掲示板前へ行きま…

「てめえ、何のつもりだ！！」

厄介事の香りが…でも野次馬根性が抑えられねえ。止まれっ、俺の両足！

「だからわたしは他人と共闘なんて無理つて言つたの、もう付き纏わないで」

結局見に来ちまつた…それにしてもどうしたんだ？

ああ、読者の皆さんを置いてしまつたな。今俺の目の前ではゴツい男2人と、俺と同じ年くらいの灰色の髪をもつ少女（ロッドを持つているから魔術師だろう）が言い争つていた。

「てめえが仲間を敵ごと魔法で怪我させたんじやねえか！何だその口のききかたは！！」

ふざけんじやねえ！と、男は少女を殴る！とする。つて冷静に実況してゐる場合じやねえ！

「止めるよ。大の大人が暴力振り回してんじやねえよ」

と、男と少女の間に入つて男の拳を止める。はあ、結局厄介事に首突つ込んじやつたよ。

「てめえには関係ねえだろ！？引っ込んでろ…」

と、男は俺の肩を強く押す。いや、押そうとする。しかし努力の結果虚しく俺はびくとも動かない。

これがこの男の本気だとしたら見かけ倒しもいいところだ。

「目の前で女の子が殴られそうなのに黙つて見てられる程腐つちやいないんでね」

決まつたー！俺の言いたい言葉ランキング第3位の言葉を言えた

♪

表面上は何て事ない顔してるけど、内心はしゃざわくつである。

「てめえ、表へ出ろ！」

えへ、俺これから依頼受けよつと思つてたのに。時間無くなつちやうじゃん。何で動いちゃつたんだよ俺の足！

つか最近厄介事に巻き込まれる率が半端じゃないんですけど…
1回お祓いしてもらおうかな、作者が俺に取り憑いてますって。危
ない人だと思われること請け合いだな。

「どうした？早く來い。今更謝ったところでもう遅いからな」

おっと、男が待ちくたびれて言つてくる。最近のすぐキレる若者
つて恐いっ。つていうか俺の行動の中に謝るような要素あつたか？
いや、無いはずだ。（反語）

そんな事を考えつつ男の後ろを歩いていく。

ギルドの中にいる者が騒ぎ立てる中、件の少女だけがどこか冷めた
目でこれを見ていた。

16 なんか、巻き込まれました（後書き）

次回予告

潤「はあ、面倒くさいな～ホントに。今から次回が憂鬱だ。俺の運命の管理人（作者）は早いところどうにかしないとな。さて、サッサと男倒して冷めた少女の攻略といきますか」

17 なんか、冷たいです（前書き）

ジュン　は　ふたまた　を　しょつ　と
ゆるします　か？

・はい

・いいえ

・爆発しろ

17 なんか、冷たいです

俺は男に連れられて外に出た。

「さあ、死にたくないきや 全力で来な！」

こんな所で全力なんて出せるわけねえだろ。 つてか全力出したら本当に殺しちゃうかもしれないだろ。

「ハイハイ。じゃ、いくぞ」

と言つて俺は全身に魔力を巡らせる。 もうお馴染みの身体能力強化だ。

「いい気迫だ。 てめえ名前は何て言つ?」

自己紹介してるような暇は無いんだけどなー。 まあ、いいや。

「じゅ、いや・ウェルだ。 ウェル、ウェル、 ウェル・カリー? い

や、 ウェル・カーラーだ」

やつちまつたアアア!! 本名言いそつになつた上に偽名間違えたア!! 何だよカリーツてネイティヴなカレーかつ!?

「? 変な奴だな。 カリーは俺だ。 アレン・カリーだ」

カリー居たアアア!! どんな偶然だッ!

「そ、 そんな事よりサツサと終わらそつ」

マジでお願い。 これ以上ボロだす前に早く始めよ?

「生意気言いやがつて。 いくぜ!」

と、 アレン、いや、カリーが俺目掛けて突っ込んできた。

身体能力強化をした俺の目には止まつて、 は見えないけど。 かなり遅く見える。 じゃ、 サクツと

「はい、 終わりつと」

俺はカリーに一瞬で間合いを詰め、 鳩尾に軽く一発叩き込んで意識を刈り取つた。

カリーと一緒にいた男は、 カリーが倒されたのを見るや否や逃げ

出してしまつた。薄情な奴だ。

「さじ」

ギルドに戻つて少女の心を開かせるとしますか。

「よつ」「ひみ

ギルドには彼女と受付のお姉さんしか居なかつたのですがに見つけられた。

「なんですか？」

おおうっ、随分冷たい…」リヤセレンの時より難しそうだな。

「変な奴に絡まれて大変だつたな」

「今もあまり変わつていません」

え？ それつて俺の事？ どうやら彼女の認識では今も変な奴（俺）に絡まれて大変な状況らしい。ああ、田から汗が出てきた。今日そんなに暑くないのに。

「そりやど～も。といひで君の名前つて何て言つの～？」

とりあえず話題変更。

「何であなたに教えないではないのですか？」

「君に興味があるつてだけじゃダメか…」

「ダメです」

俺の恥ずかしさを堪えて出したキザなセリフがバツサリ切り捨てられたア！ まだ言い切つてなかつたのに…

「じゃ、俺の名前でも…」

「興味ありません」

そう言い残して彼女はギルドを出て行つた。

まあ、今日一日で心開いてくれるとは思つてなかつたけどね。

「ナンパに失敗してしまいましたね」

受付のお姉さんがニヤニヤしながら見てくる。

ヤメテッ！何か恥ずかしくなつてきた！

その後何だかんだで夜の10時頃に俺は宿の部屋へと戻った。何してたかって？何だかんだだよ、何だかんだ。そこには既にセレンが帰つてきていた。

「遅かつたわね」

そう言つて俺を迎えてくれる。ちゃんと喋つてくれる女の子が居るつていいなあ。さつきとは別の種類の涙が…
「セレン～！やっぱりお前が一番だ～。俺にはお前しかいない」
そう言つてセレンに抱き付く。

「え、ちょ、な、何！？は、離れなさいよ。バカッ！」

顔を真つ赤にして言つてくる。

嫌そうな顔をしてないところから察するに…うん。久しぶりのツンデレだな。

「ゴメンゴメン。今日も～魔術師の女の子に声掛けたんだけど、冷たくあしらわれちゃつてさ～」

俺がそう言つとセレンは目に見えて不機嫌になつて、「バカッ！ジユンのバカ！バカジユン！もう知らない！」

と言つて自分の部屋に戻つてしまつた。

やつぱり女の子の前で別の女の子の話題はタブーだったかな？謝りに行こうかとも思ったが、もう時間も遅いので明日謝ることにして今日はもう寝ることにした。

17 なんか、冷たいです（後書き）

次回予告

潤「ああ、明日はやることがいっぱいだぞ！セレンに謝つて、あの娘の心を開いて、ギルドでお金稼いで…まあ、頑張りますか」

18 なんか、再戦するみたいですね（前書き）

遅くなりました。

言い訳をするなら、他の作者さんの作品を読んでもました。
そうだ、私は悪くない。悪いのはあんな面白い作品を書く作者さん
がいけな…すみませんでした。

18 なんか、再戦するみたいですね

・・・朝になってしまった。昨日は明日の朝にでも考えればいいや、と思っていたのだが、どう謝つていいか分からぬ。

例えるならそう、テスト前日に明日の朝勉強すればいいや。と思つてその日の夜をゲームに費やしてしまい、次の日の朝に後悔するあの気持ちと相似である。ちなみにこれは作者談であり、俺も元の世界で何回かやらかした事もある。

おっと、こんな事言つてる場合じゃないな…

案としては、早いとこ謝る。謝罪の意思表示の為に、謝ると共に贈り物をする。この2つが有力候補だな。紙に書いとくか。

うん、早いとこ謝るを選ぶなら昨日の夜に謝るべきだったな。

そう思い早いとこ謝るにバツをする。

だとすると贈り物か…セレンには悪いけどこの件は俺が贈り物を買つまで先延ばしにしてもらおつ。

そして贈り物と書いた方にマルをして机の上に置いておく。

「さて」

謝らないのにセレンと会うのは気まずいな…今はまだ6時だけどギルドに行きますか。

『用があるから先に行つてゐ』といつ書き置きをドアに貼つておく。これで気付くだろう。

そして俺は眠い身体を動かしてギルドへ向かつた。

ギルドには朝だというのに人が結構いた。みんな仕事熱心だなんて感心してしまつたが、後で聞くと今ギルドにいる連中は家がなく、ギルドに入り浸つて1晩中酒を飲み続いているらしい。だからこんなに酒臭いのか。

「今日はどんな依頼を受けようかな？」

昨日の昼まではギルドにあまり乗り気じゃなかつたくせに何で今はノリノリのかつて？そりや贈り物をするつていう目的があるからでしょ。昨日も剣を買つて目的はあつたけどほら、モチベーションの違いが、ね。

さて、依頼依頼

『Aランク討伐依頼』

キルファ村の東にあるシグト山にジーニアスワームが確認された。村に被害を及ぼす前にこれを討伐せよ。

報酬：30000ワロ

証明部位：ジーニアスワームの触角

注意：見た目通りの凶悪なまでのパワーと見た目からは想像出来ない頭脳戦も使える魔物。パーティを組まねば初級冒険者はもちろん上級冒険者も返り討ちに遭つだらう。

そこに載せてある写真は以前俺が死にかけた件のワームだった。あのテカブツ、そんなに強かつたんだな。確かに俺も死にかけたけど。

この依頼はそこら辺の冒険者が受けると死者が出るかもしけれないな…俺は昨日のカレーとの、違つた、カリーとの戦いで冒険者がどのくらいの強さか分かつたが（今朝酔つぱらいから聞いたがカリーはこの村では腕の立つ方らしい）、あの程度では戦いにすらならぬいだらう。

「俺がやるか」

という一種の責任感の下、この依頼を受けることにした。

「おはようございます。この依頼を受けたいんですけど」

受付まで依頼用紙を持って行った。

「おはよつじざいます。依頼の受注ですね……この依頼を受けるんですか!? いくらビッググリザード30体を1人で殲滅したからって、この依頼は冒険者になつたばかりのあなたには無謀かと… あなたがやらなくてもこの村の中級冒険者がやつてくれますよ。最近この近くに現れたジーニアスワームを倒した手腕の持ち主も来てくれるかもしれませんし…」

その声はどこか絶望が混じつているように感じた。
「来てくわななかつた場合はどうなるんですか?」

「中級冒険者では多分無理でしょうし、国はこんな辺鄙な所にある村なんて放つておくでしょうから軍にも期待出来ません。村にジニアスワームがやつてきたらあきらめるしか無いでしょうね」

国の軍つてのはそんなもんなのか…

だからさつき受付のお姉さんはどこか絶望したような感じだったんだな。しかしそんな事言つと、

「やつぱり俺が受けます。この村にはお世話になりましたし

より一層この変な責任感が暴れ出しちゃうじやないか。

「これ以上何か言つても聞いてくれなさそうですね。分かりました。依頼の受注、確かに承りました。お気をつけ下さい」

その声は不安に満ち溢れていたが、逝つてらっしゃいっていわないだけいいか。もうこの作品の中じやお約束のネタになつてきてるからな…

「じゃ、逝つてきます!」

お約束なら俺もやらないとな!

「洒落になつてしませんからヤメテ下さー!」

言われてしまつた。そんなに頼りなく見えるだろつか…

へ~イと、返事をして出て行く。

「え!? 1人で行くんで…」

何か言つていたが聞こえないと、

そう言えば今日はあの娘居なかつたな…まあ朝早いからな。

さて準備を整えてワーム倒しに行きますか！

待つてろよセレン。良いもんプレゼントしてやつからなー！

18 なんか、再戦するみたいですね（後書き）

次回予告

潤「ああ、セレンには何をプレゼントしようかな～。わっわとワーム倒してセレンの笑顔を取り戻してやるぜーえ？元はと詮ればお前が悪い？まあそういうわざに…」

19 なんか、科学的です（前書き）

作者が初登場を果たします。

19 なんか、科学的です

さて問題です。俺は今何処にいるでしょうか？

- 1・山の中
- 2・焼け野原
- 3・ワームの前

正解は…全部で…す！

そうなった経緯は至極簡単。回想をするまでもないね！

山登り ワームを見つけ 焼け野原

ほら、五七五に収まった。え？ 説明になつてない？

そのまんま何だけどな。準備整えて山に登つたら、運良くワームを見つけて、森が邪魔だつたから魔法で焼き払つた。魔物愛護団体の次は自然愛護団体に怒られそうだけどな。

さて、さつきも言つたが俺の目の前には討伐対象のワームがいる。前回戦つたワームより一回り小さいが、大きいことには変わりがない。それに何か黒い。真っ黒だ。・・・日焼けしたのかな？そんなわけないか。

「お前に恨みはないが、コッチも仕事なんでね…死んでもらうぞ」
悪役になつてる？いやいや、人聞きの悪いこと言わないで下さいよ。前も言つたけど俺は善良な一般市民だから。

そんな事を思いながら俺は身体能力強化をかける。
「そろそろ技の名前でも付けるか、いちいち長つたらしいし」
そして既にテンプレになつてきてる魔力の黒刀を生成する。
「準備も出来たし、いくぜっ！」

そう言つていっしゅ…刹那のうちにワームまで間合いを詰める。・

・・別に一瞬を刹那と言つたことに深い意味はない。

「ハアアツ！」

と氣合いを入れて10太刀くらいワームに浴びせる。しかし、

キキキキンッ！と、金屬質な音がして、ワームの身体に傷つけることは出来なかつた。

「情報通りだな。山で育つたようなワームは硬い鉱物を食物としていて、身体がダイヤモンドのように硬くなつてゐらしい」

はで、誰に向けての説明口調だつたんだろう。

「ならつ、黒鴉つ！」

またまた説明しよう。黒鴉とは以前のビッグリザード戦の時、刀に魔力を溜めて放つた技の名前だ。形状が翼を広げた鴉が敵に突っ込んで行くように見えるから、今名付けた。

ギンツ！というさつきとは違つ音が響いた。ワームの表面に刀傷みたいな痕があるところを見るに、少しば効いたようだ。

さて、次は…と考えていると、ヤツは口を開けて俺に岩を吐き出してきた。

（この攻撃はつ！）

何か見覚えのある攻撃方法だ。みんなも気づいただろ？俺を瀕死に追いやつた原因となつたワームの連続技だ。

飛んでくる岩の配置は俺が右へ逃げるよつた時にそこだけ岩が飛んできていなかつた。

（同じ攻撃は食らわねえよ！）

と、俺は避けることはせず、

「黒鴉！」

で自分に当たる岩だけを砕き即座に

「貫け天雷！サンダーボイル！続いて～、切り裂きの風刃！テクノ

「ウインドー！」

と、2つの魔法を放つた。サンダーボイルは真っ直ぐにワームに向かい、テクノウインドは対象をサンダーボイルに設定し、雷の弾丸に風の刃を纏わせた。

流石にこれだけの魔法には耐えられなかつたが、ワームの身体を貫通する。

・・・ヤツは中も黒い石みたいなので出来てゐるのか。よし、実験の時間だ。

「狂気に乱舞しな！テクノウインドー！まだまだ！テクノウインドー！テクノウインドー！テクノウインドー！」

詠唱が毎回変わるのは気にしないでほしい。なんせその時に思いついた言葉を言つてるだけなんだから。大事なのはイメージなんです。イメージ。大切な事なので2回言いました。

ああ、俺が何したかなんだけど、ワームの体内をテクノウインドで粉々にしています。粉々にアンダーライン、ここ重要。

そんな事出来んのかつて？さつきワームに穴あけた時の傷痕から掘り進んでるから出来ちゃうんだな。

・・・さて、そろそろかな。

「仕上げのファイヤー！」

と、ワームの体内にファイヤーを唱える。最早詠唱してないつて？馬鹿言つちゃいけませんよ。ちゃんと仕上げのつて詠唱したじやないです。

ドガーンッ！――――

といつ音と共にワームの身体はバラバラになつた。

何をしたのかつて？じゃあ科学の授業をしてあげましょ。え？そこまで聞きたくない？え、ちょ、お願ひですから聞いて下さい。

『炭塵爆発』って知ってる?まあ、粉塵爆発の一種なんだけど、炭の粒が舞い上がっているところに種火を注ぐと大爆発が起こる現象のこと。比表面積、つまり体積に対する表面積の・・・(長くなりそなので暫くお待ち下さい)・・・っていう事。みんなも粉塵爆発には気を付けよう?

後は何故あのワームの身体が炭で出来ているか気付いたかだけど、ヤツの身体が黒かったことが一点。事前に調べた情報にダイヤモンドのように、つて書いてあつたからな。もしかしたら炭素を多量に含んでいて、炭素の結合が頑丈だつたからじやないか?つて思つてね。そもそも炭素つていう物質は・・・(長くなります。度々申し訳ありません)・・・という訳。

おつと、話し込みすぎて暗くなり始めちゃつたな…
つて、俺は10時間くらい話し続けてたのか!やべつ、セレンに謝んなきゃいけないのに。

という事で、吹っ飛んでしまつたワームの触角を探すのに更に1時間かかって、15秒で下山し、村へと戻つた。

潤が下山した後の焼け野原にて、

「はい。あの力は我が国に多大な利益をもたらすかと…はい。では引き続き羽山 潤という異世界人を監視します」

という何者かの無線での通信を知る者は、恐らく私(作者)だけだろう。

19 なんか、科学的です（後書き）

次回予告

潤「よし、セレンにプレゼントする分のお金が稼げたぞ！あとは報告してお金貰つて品を買つだけだ！どんな物を贈れば喜ぶだろ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239z/>

気まぐれセカンドライフ

2011年12月5日19時52分発行